

【研究ノート】

香山六郎による日本語・ツピ語同祖論の社会的影響に関する一考察  
—— ブラジルにおける日本語新聞を中心に ——

長尾直洋

A Study on the Social Influence of Rokuro Koyama's Hypothesis  
that Japanese and Tupi Languages Share the Same Origin:  
Focusing on Japanese Newspapers in Brazil

NAGAO Naohiro

要旨

本研究は、第二次世界大戦後におけるブラジル日本移民の自己表象の多様性を示す一環として、日本移民のブラジル国民統合モデルへの接近の一事例について、その社会的影響力の再評価を行うものである。ブラジルへの移民当初より日本人と先住民の類似性に注目していた香山六郎は、第二次世界大戦での日本敗戦を巡る日系コロニア内部の紛争が後を引いていた1951年に日本語と先住民語の小辞典を編纂した。香山による日本人と先住民の同祖論について、先行研究は1930年代以降ブラジルの国民統合モデルの重要な一要素となった先住民イメージへの日本移民の接近を試みたユニークな論であると評価する一方で、その社会的影響力を否定している。本研究では、日本語新聞等の資料を分析対象として、香山著作の出版及び頒布状況、当時のコロニアの主要言説空間と捉えられる日本語新聞上における香山論の展開への分析、ブラジル社会への香山論の伝播の可能性を検討することで、同論が当時のコロニアにおいて一定の社会的影響力を持っていたことを示す。

キーワード：ブラジル日本移民史、勝ち負け抗争、香山六郎、ブラジルの日本語新聞

I. 研究の背景と分析姿勢

1908年に始まった日本人のブラジルへの集団移民は、1941年までに約19万人を数えた（国際協力事業団1994）。サンパウロ州内陸部のコーヒー農園労働力として導入された日本移民の多くは、その後自営農となり、日本人集団地を形成して米や綿などを栽培した。また一部は都市部で様々な職種に就いた。1924年に日本政府による渡航費補助が開始されるとブラジルへの日本移民数は増加の一途を辿った。出稼ぎ目的で渡航した日本移民の大半は、来る錦衣帰郷に備えて、日本人集団地などに設立された日本人学校へ子弟を通わせた。1920年代以降、ブラジルでは北米における黄禍論の影響や日本の軍国主義への懸念によって排日の動きが強まった。1930年代にはジェットリリオ・ヴァルガスによる国家主義的政策の下で移民子弟への外国語教育が禁止され、1941年には外国語新聞の発行も禁止された。同年12月に太平洋戦争がは

じまると、連合国側に立ったブラジルは枢軸国民に対して自国語文書の配布、公共の場での自国語会話、集会の禁止や移動の制限など様々な制約をかけた。このような状況下、日本移民の大多数は日本の大本営放送をラジオで聴くなど、戦況に関する偏った情報しか得られないまま終戦を迎えた。ブラジル時間の1945年8月14日に日本の敗戦が伝えられると、間もなく日本の勝利を喧伝するデマ情報が日本移民間に飛び交った。終戦直後、日本移民の大多数が日本の勝利を信じたのに対して、一部の指導者層や知識人層は日本敗戦をいち早く受け入れ、同胞へ認識させようとする動きを見せた。前者は勝ち組、後者は負け組と称された。負け組の行動を日本への不敬と捉えた勝ち組の過激派によって負け組幹部が暗殺されると、双方に激しい対立関係が生じた。勝ち負け抗争と呼ばれたこの動きに対してブラジル社会は大きな懸念を抱いた。ブラジル官憲は勝ち組系団体所属者を大量投獄し、また第二次世界大戦前（以降「戦前」と表記）にも問題

となった日本移民排斥論が再加熱した（日本移民80年史編纂委員会編 1991）。

勝ち負け抗争について、従来のブラジル日本移民史はその紡ぎ手であった負け組側の視点を採用している（長尾 2016: 151; 深沢 2017: 16）。しかしながら、近年ブラジルの人種主義の歴史との関連において、勝ち組側を再評価する動き、すなわち勝ち負け抗争はブラジル社会の抑圧に対して日本移民が抵抗した証であるという解釈がみられるようになった（深沢 2017; 三田 2018）。この動きは、ブラジル日本移民史に新たな視角を提供するものといえる。

本稿は、先に紹介した動きとは角度が異なるが、同じくブラジル日本移民史に新たな視角を提供する試みであり、第二次世界大戦後（以降「戦後」と表記）のブラジルにおける日本移民の自己表象の多様性を示すことを目的としている。具体的には、当時のブラジル社会における国民統合モデルであった人種民主主義への日本移民の接近について、その社会的影響力の再評価を試みる。

ブラジルにおける人種民主主義は、1930年代に社会学者のジルバルト・フレイレによって確立された。ブラジルは白人、黒人、先住民の混交で構成され、ゆえに差別もなく、ブラジル独自の熱帯文化が生まれたというものであり、同時代におけるヴァルガスによるブラジル国家統合政策にも寄与した（フレイレ 2005 [1933]; Haberly 1983: 16-17; Sommer 1991; 細川 2008; 伊藤 2010）。

第一回笠戸丸移民であり、戦前は日本語新聞の社主でもあったブラジル日本移民知識人の香山六郎は、ブラジル人の基層をなす三つの人種構成要素のうち、先住民に注目した。香山は移民当初から日本人と先住民の近縁性に関心を持っており、戦後、勝ち負け抗争の影響が未だ残っていた1951年に日本語と先住民語の辞書を出版し、両者の同祖論を唱えた（香山 1951; 細川 2008）。香山論を分析した細川周平は、本論について「ブラジルの正式な国民のメンバーとは見なされていない日本人が、実はヨーロッパ人よりも先に住む部族の兄弟であるという政治的含み」（細川 2008: x）を持つものであり、勝ち負け抗争で肩身の狭い思いをしていた日本移民が「起源においては日本人だが、ブラジル社会の一員であることを両立させる起死回生の神話」（細川 2008: 261）であったと評価している。ただし、細川は「香山の呼びかけは彼の共同体の外にはまったく響かなかつたし、その内部でも一部の言葉好きの奇想と見なされるに留まった」（細川 2008: 288）と、その社会的影響力を否定している<sup>(1)</sup>。

筆者は別の論考（長尾 2019）の執筆にあたり、当時ブラジルで発行された日本語新聞を確認する機会を得た。その際、出版年である1951年を中心に、『ツピ単語集』の出版と流布の状況、また香山論を扱った記事を複数確

認できた。これらの情報から、先行研究による同論の社会的影響力への評価は再考する余地があると考えた。

日本人と先住民の近縁性に関しては、北米の黄禍論の影響や日本の軍国主義への懸念による1920年代以降における排日の動き<sup>(2)</sup>の際に、主に日本移民擁護側のブラジル知識人層によって、日本移民の同化可能性を示す根拠としてしばしば言及されていた<sup>(3)</sup>。戦後、勝ち負け抗争の余波でブラジル社会において不安定な状況にあった日本移民のブラジル人種民主主義への接近を示す香山論は、ブラジルにおける日本移民の自己表象の多様性を示す重要な事例であり、その社会的影響力の再評価には一定の価値を求めることができよう。以下、ブラジル日本語新聞を主要な分析対象とし、香山論の社会的影響力の再評価を行ってゆく。

本稿では、ブラジルで発行された日本語新聞を日系コロニア<sup>(4)</sup>における主要な言説空間として捉え、同言説空間における香山論関連記事への質的分析を行っていく。本稿における「言説」の定義は「特定の時代に特定の人々が特定の話題に関して表現した内容」（鈴木 2006: 205）であり、「単にテキストを分析するだけでなく、それを産出し受容した社会的コンテクストや、言説が与えた社会的影響」「考えや概念・分類などといった内容面に加えて、それらが作られた文脈や発せられた相手」（野村 2017: 251-252）を踏まえて考察を行う。

## II. 香山六郎略歴と先行研究の確認

香山六郎は1886年熊本県生まれで、1908年に笠戸丸でブラジルへと渡った。1921年にはサンパウロ州内陸部のバウルー市にて日本語新聞の聖州新報を創刊した。同紙は後にサンパウロ市へ移転し、戦前の邦人社会における三大新聞の一角となった。香山は1934年に移民25周年の記念誌を編纂、戦後の1949年には移民知識人層を動員して『移民40年史』を出版している。先に言及したように、1951年には『ツピ単語集』を出版した。その後視力を失いながらもツピ語研究を継続し、1970年には『ツピイ音語ニエムの語原意味で人類音語一音一音を意味完成研究』の第一篇、1973年には第二篇を上梓した。1976年にその生涯を閉じている（香山 1976）。

『ツピ単語集』は136頁の小冊子で、約2,500語のツピ語・ポルトガル語・日本語が対訳形式で掲載されている。細川によれば、著者の香山自身は語の選択基準を明確にしていなかったが、同著は鉱物（100語）、植物（90語）、水（70語）、魚（50語）、昆虫（40語）、森林（40語）、地名（少なくとも50語）といった自然関連の語を多数収録している（細川 2008: 250-254）。香山の研究に注目した細川は、『ツピ単語集』について詳細な分析を行っている。以下

に、その要点を確認してゆく。

『ツピ単語集』の冒頭では、日本語とツピ語の同祖性について、その発想に至る出発点となった日本人とツピ族<sup>(5)</sup>との容貌の類似への記述がみられる。

ツピー・グアラニー土人の容貌、それは全く私共日本人そっくりだと、一眼みて忘れられなくなった。見れば見る程日本人そっくりだ。現ブラジル人も、欧州人も「此処の土人と日本人はよう似てるぞ」と噂している…土人も日本人との仲でも、接すれば欧州人よりも一層和やかにお互ニコニコを仕合うのである。ツピー・グアラニー土人も日本人も、源をただせば太平洋の同じポリネシア系の人間の胤を、約四千年前から受け継いで、今日に到って再会したからであろうか。土人ツピー・グアラニー語は、日本の大昔の人々が喋ってた言葉と同じでなかったろうか（香山1951: 1; 細川 2008: 245）。

ここでは、日本人とツピ族の容貌の類似と、両者の言語の類似が関連づけられている。また、日本人とツピ族の起源をポリネシア系とする描写について、細川は同著の参考文献中にあるフランスの人類学者ポール・リヴェの『アメリカ人の諸起源』に依拠していると指摘している（細川 2008: 246-247）。細川による香山説の要約を参照すると、原日本人＝原ツピ族はポリネシアに住んでおり、数千年前に日本とブラジルへ移動したが、日本に移った人々は文字を持ち文明化され元々の言語を忘れた一方で、ブラジルに渡った人々は元々の文化を保持したとして、日本語とツピ語の同祖性が示されるのであった（細川 2008: 238）。

細川は『ツピ単語集』の参考文献であるブラジルの国民主義的思想家テオドロ・サンパイオ、ツピ語学者プリニオ・アイローザ、そして歴史家アフォンソ・ジ・フレイトスの著作に触れ、ブラジルの国民創成モデルの構成分子である高貴な野蛮人としてのツピ族について、「香山がツピ観の変遷をどれだけ知っていたかはわからないが、ロマン主義的で国民意識の礎となるツピ像はよく理解していた」と述べている（細川 2008: 249-259）。「起源においては日本人だが、ブラジル社会の一員であることを両立させる起死回生の神話」（細川 2008: 261）と細川が評したように、香山による日本人とツピ族の容貌そして言語の類似への注目は、ブラジル国家統合モデルの構成因子としてのツピ族への日本人の接近を意図したものと見えよう。

容貌・言語の類似の他に、『ツピ単語集』には日本人とツピ族の共通性に関して先住民の「真の連合共同体社会」への肯定的描写が見られる。

土人は毎朝早くに起きた。先づ流れに行き行って沐浴した。朝食後仕事に出掛けた。耕作に、漁労に、狩猟に、部落社会の食料補給である。婦女は家屋で働いた。夜は屋の焚き火のほとりに集まった。火をいじる若者共にそのオカ〔家屋〕の長老が、何かと話すならわしであった（香山1951: 8; 細川 2008: 260）。

細川は、本描写における参考文献の元情報からの改変とその意味について、女性の家事への専念、夜の焚き火を囲んでの物語会の描写の追加は、戦前の日本移民による開拓前線の理想化された生活を喚起しており、また食人描写の削除は、悪名高い慣習を無視することでツピの牧歌的イメージを強調していると論じている。これらの改変による、同祖である先住民の共同体的イメージの生成は勝ち負け抗争によるコロニア内の分裂を意識したものであると細川は指摘している（細川 2008: 260-261）。

この土語の意味が解って喋られたら、聞かれたら、喋る人、聞く人の中に詩的情緒もユウモア気分も沸き、人々の心を和やかにするんでなかろうかと、特に邦人コロニアのために出版した（香山 1951: 2; 細川 2008: 261-262）。

戦前からブラジル永住論を説き、戦後は敗戦認識運動の後ろ盾としてコロニアの社会政治状況を案じた、俳人でもある香山は、『ツピ単語集』を通して「詩的情緒」と「ユウモア気分」による緊張緩和と民族集団の統合を呼びかけたのであった（細川 2008: 261-262）。

以上、『ツピ単語集』への細川の分析について概観した。香山によって1951年に世へ送り出された『ツピ単語集』は、日本人と先住民の身体的・言語的近縁性を根拠として、同祖である先住民の共同体イメージを日本移民に重ねることで、ブラジル主流社会の正当な成員としての日本移民を自己表象し、また勝ち負け抗争を原因としたコロニア内の緊張緩和と民族集団の統合を呼びかけるものであった。

### III. 調査資料の属性

IIにて、『ツピ単語集』内の香山論の諸要素について確認した。III、IVでは、同書出版当時のコロニアの主要言説空間と考えられる日本語新聞を資料とし、同書関連記事を抽出して分析することで、香山論の社会的影響力について考察してゆく。

本稿では、戦後にサンパウロ市にて発行されていた主要な日本語新聞のうち、サンパウロ新聞、パウリスタ新聞、日伯毎日新聞、伯刺西爾時報を対象とする。調査範

困は、『ツピ単語集』が出版された1951年から、ブラジルへの日本人戦後移住が本格的に開始され、敗戦後の日本の状況が生の声としてコロニアへ多数届くようになる1953年上半期までとした。以下、調査対象の各紙の属性を確認する。

サンパウロ新聞は1946年10月創刊で、勝ち負けに触れない天皇帰一論をかざすことで勝ち組負け組双方を読者層とし、徐々に日本敗戦事情を広める戦略で部数を伸ばした。創刊当時の発行部数は約1万部とされている。本稿では、サンパウロ新聞社所蔵の1951年2月から1953年6月までの新聞原紙、441号から757号までを調査対象としたが、1951年1月、11月、12月分の所蔵はなく、また同年2月は17日付分のみ確認できた。

パウリスタ新聞は1947年1月創刊で、負け組側の機関紙として認識運動を行ったが、創刊当初はコロニア内では少数派であり、部数を伸ばすのに苦戦した。創刊当時の発行部数は約4,500部とされる。本稿では、ニッケイ新聞社所蔵の1951年1月から1953年6月までの新聞原紙、532号から1208号までを調査対象とした。

日伯毎日新聞はパウリスタ新聞から分離した一派により、1949年1月に創刊した負け組側の新聞である。創刊当時の発行部数は定かではなく、10年目で2,000部から3,000部を発行していたという。本稿では、ブラジル日本移民史料館所蔵の1951年1月から1953年6月までのマイクロフィルム、547号から1218号までを調査対象とした。

伯刺西爾時報は戦前より発行されており、戦後は1946年12月に復刊、勝ち組側の立場をとった。発行部数は不明である。本稿では、国際日本文化研究センターホームページの「海外邦字新聞データベース」所収の1951年1月から1952年12月までのデジタルデータ、3075号から3340号までを調査対象とした<sup>(6)</sup>。

#### IV. 日本語新聞内における香山論関連記事の分析

##### 1. 香山論関連記事の内訳

各日本語新聞への調査の結果、計13の香山論関連記事を抽出することができた。新聞別では、サンパウロ新聞が2記事（直接名指しはされていないが、香山論の属性への重要な示唆がなされた1記事を含む）、パウリスタ新聞が7記事、日伯毎日新聞が4記事、伯刺西爾時報は掲載なしであった。勝ち組側の新聞であった伯刺西爾時報では、例えば「敗戦患者」など、負け組側の香山を揶揄するような記事がしばしば掲載されており（伯刺西爾時報 1951年1月22日3083号3面）、香山の著作を意図的に無視した可能性が考えられる<sup>(7)</sup>。他方で負け組側の新聞を中心に『ツピ単語集』が取り上げられていることが窺える。記事の年別分布をみると、1951年に10記事、

1952年に1記事、1953年に2記事となっており、特に『ツピ単語集』の出版年に一定の関心があったことが見て取れる。

各記事の属性としては、香山の持ち込みによる広報記事が3点（日伯毎日新聞2点、パウリスタ新聞1点）、香山による寄稿記事が2点（パウリスタ新聞2点）、他者による記名寄稿記事が2点（日伯毎日新聞1点、サンパウロ新聞1点）、新聞社による記事が6点（日伯毎日新聞1点、パウリスタ新聞4点、サンパウロ新聞1点）となっている。

##### 2. 『ツピ単語集』の出版及び頒布状況

『ツピ単語集』の社会的影響力について否定的に捉えた細川は、同書の頒布状況について詳しくは触れていない<sup>(8)</sup>。同書の出版及び頒布状況については、香山論関連記事のうち、主に新聞社による記事を中心に確認ができる。

同書は1951年8月に日本の大日本印刷株式会社より発行された。総発行部数は1,500部で、うち500部は広辞苑編纂の新村出やアイヌ語研究の金田一京助など、日本の言語学者等に配布されたという（日伯毎日新聞 1951年7月25日705号2面; 1951年10月9日768号3面）。残りの1,000部はブラジルへ送られ、日本移民が多数住むサンパウロ州やパラナ州内の書店、代理人<sup>(9)</sup>を通して予約、頒布がなされた（日伯毎日新聞 1951年7月25日705号2面; パウリスタ新聞 1951年10月7日749号3面）。また、香山自身によるパラナ州への販売旅行も計画された（香山 1976: 435）。

当時の出版物の発行部数については、パウリスタ新聞社が1950年に刊行した『1950年版 パウリスタ年鑑』の「出版界」の項目における、戦前から戦後数年のコロニア内の出版状況が参考となる。戦後における定期刊行物以外の刊行物に関しては、1949年の西本哲郎編『サンパウロ案内』が3,000部で大部印刷扱いであった（パウリスタ新聞社 1950: 187）。定期刊行物では、1948年から再刊された椰子樹短歌会の機関紙『椰子樹』が毎月500部、ホトトギス派の佐藤念腹主宰で同年に創刊された俳誌『木陰』が毎月600部以上で戦後の日本移民文芸界の盛況を示しているとされた（パウリスタ新聞社 1950: 187）。一般書で大部印刷された『サンパウロ案内』には及ばないが、日本移民に人気のあった文芸誌の二倍以上の1,500部が刷られ、そのうち1,000部がブラジル国内の日本移民集住地域で頒布された『ツピ単語集』の存在は、当時のコロニアにおいて一定の認知を得ていたといえよう。

##### 3. 香山の持ち込みによる広報記事

香山の持ち込み広報記事のうち、1951年3月4日に日

伯毎日新聞、パウリスタ新聞へと掲載されたものは、単語例の紹介部分以外は同じ原稿を元にしたものと思われる（日伯毎日新聞 1951年3月4日594号4面；パウリスタ新聞1951年3月4日579号2面）。「豫約出版廣告 ツピ語の単語集 葡語及日本語對譯付」と題されたこの記事は、「日本人によう似た容貌の伯國土人ツピ族の言葉は…」と日本人とツピ族との容貌の類似の指摘から始まり、ブラジル植民地期における共通語としてのツピ語の地位、鉄道駅や地名に代表されるブラジルに残るツピ語の影響を紹介している。記事の最後には以下の文言が記されている。

吾コロニア各家族がツピ語の意味をパバガイオ<sup>(10)</sup>式でなく眞に理解ししゃべつて下されば暖かい人間味がしゃべる人の氣分にも、聞く人の氣分にも現われ、詩的感興も湧きユーモアも生れ、お互の生活に關する汎い視野と深い知性の理解も起き、眞にブラジル土着人の氣持になれるんであろう、そうして何處はダイヤモンド地帯であり、何處には大森林があつたのだ、何處は健康地帯であると知り、金儲りにもなるでしょう（日伯毎日新聞 1951年3月4日594号4面）<sup>(11)</sup>。

この文言では、IIで確認した『ツピ単語集』内の要素である容貌・言語の類似、勝ち負け抗争によるコロニア内の緊張を緩和する目的が示されると共に、先住民語の理解による心情的な先住民への接近、現世的利益との関連が示唆されている。また、単語例の紹介部分の最初には雨を意味するツピ語Amanaが置かれ、その後には以下の文言が記されている。

日本語に似た言葉もあります「日本の古語」が斯うしたものであつたらうと新発見される方もあろうと豫期されます（日伯毎日新聞 1951年3月4日594号4面）。

ここでは、『ツピ単語集』で確認した日本人とツピ族の同祖性に関する香山論に則り、「日本の古語」とツピ語の類似性が示唆されている。

日伯毎日新聞へは、出版広告の後に予約締切と配本の案内も掲載されている。こちらには、日本での印刷製本状況の報告、価格と予約締切、また予約取り扱い先についての案内に加えて、ツピ・グアラニー族の「土族學的」記述といった単語集の持つ辞書以外の要素の紹介がされた。

本書はツピー語単語三千余字ばかりでなく、同言

語の文典も概略述べてあり、ツピー、グワラニー族の宗教観、お祭、男女青年達成期式、結婚出産、對病手當、埋葬等、土族學的な記述もあります。日本人種によう似た容貌のブラジル土族の言葉とその土族學的記述の本書は、母國讀書界にも賣出され、日本の言語學界にも興味をもつて紹介されています（日伯毎日新聞 1951年7月25日705号2面）。

ここでは、辞書としての有用性のみでなく、ツピ族の人類學的な諸要素を知ることが可能な事が示唆されると共に、日本での頒布と言語學界での注目を紹介することで本著の価値を裏付けようとする姿勢が見て取れる。

#### 4. 香山による寄稿記事

香山による持ち込み広報記事とは別に、パウリスタ紙では香山寄稿のコラムが2回にわたって掲載された。その1回目では香山は、移民直後における先住民への関心の芽生えについて語っている。

…日本移民の見本鈴木貞次郎さんに初めて会って言葉をかけられた…鈴木さんは私共移民に大声で「君ブラジルには日本人によう似たブグレという土人が山にいるよ」と眼をかゞやかせて話された…私の腰掛に片足あげて佇っている鈴木さんを見仰いで「そのブグレ土人は日本語を話すんですか」ときいてしまった…私の心にやきつけられたものは「私はブラジルで屹度、日本人によう似ているそのブグレの言葉も勉強しよう」という誓いにも似た望みであった（パウリスタ新聞 1951年6月8日650号4面）。

先着移民からブラジル先住民と日本人の近縁性について教えられた香山は、両者の言語の近縁性に関心を持ち、研究を志したとしている。続いて香山はサンパウロ市内での初めての先住民との遭遇について筆を走らせている。

…そこに立っている髪ボウボウの日本人二人、弓と矢をもっている…これだなブグレは……私の瞳は、吾々とうよう似た人の上に吸いつけられ、血は踊っていた…「何んな言葉で彼等は話すだろうか」…その折ブグレ同士は一言も話聲を放たなかった…その歩調の動揺は日本人の歩調の陰影によう似たものをのこしていた、私の心は躍っていた「ほんとに日本人によう似ている土人だ」皆の聊か釣上がってる點、瞳の色の亜細亞人的静寂さ、鼻の格好、髪の漆黒、荒くて硬直さ、肌色の東洋的感覚、私共とこの土人

共との仲には、遠からぬ血のつながりがあるぞ<sup>ママ</sup>となつかしかった（パウリスタ新聞 1951年6月8日650号4面）。

先住民を初めて目の当たりにした香山は、日本人との容貌の近縁性を視認すると、すぐに言語の近縁性の確認を行った。先住民がその場を立ち去った際にも、容貌の近縁性を列挙しつつ先住民と日本人との血縁を主張している。

先の記事からおよそ半月後、香山寄稿のコラムの2回目が掲載された。コラム前半部では、サンパウロ市内の先住民由来地名の紹介、サンパウロ市の古本屋でのスペイン語ツピ・グアラニー語対訳辞書の入手、自らが社主である聖州新報での先住民語関連記事の掲載、先住民教化所への訪問といった、『ツピ単語集』編集に至るまでの経緯が述べられている。後半部では、ツピ語と日本語の縁故について、香山自身は言語学・語源学の専門家ではないことを前置きしつつ、日本語とツピ語単語の類似例を幾つか挙げた上で、以下のように述べている。

こうした日本語とツピー語との音や意義は、偶然の一致であろうか、そしてその容貌もツピー人と日本人、よう似ている矢張偶然によう似たものであろうか…私はツピー語と日本語との、遠い〜五千年の経だたりに今小さな〜ピカーダ<sup>(12)</sup>を、葡語を通してあけた迄である…誰が科学的に、現日本人の前史言葉と、ツピー土人の言葉とが……同じポリネシア人の語根に発するものと、明瞭に研究して呉れる人はないであろうか、と私は次の夢を描いている、淋しい夢であるが、楽しい幻ではある（パウリスタ新聞 1951年6月22日662号4面）。

香山はここで日本人と先住民の容貌の類似性に再び触れるとともに、その言語の近縁の可能性について問いかけている。さらに、単語集の引用文献によるブラジル先住民のポリネシア起源説を援用しつつ、自身が突破口を開いた日本語とツピ語の同祖論の継承を願っている。

##### 5. 他者による記名寄稿記事

香山のツピ語研究については、1951年と1953年に1点ずつ他者による記名寄稿記事が確認できた。戦前に香山主宰の聖州新報のリオ通信員や同盟通信ブラジル通信員をしていた椎野豊は、香山論が発信された1951年の日伯毎日新聞での連載寄稿記事にて香山について触れている。椎野はサンパウロ市における日本移民の精神的指導者の一人として香山の名前を挙げ、先住民語の研究に没頭しているが金儲けを目的としておらず、物欲に超然と

した先駆者的風格の持ち主であると評価している（日伯毎日新聞 1951年10月28日783号3面）。

1953年には『ツピ単語集』の日本での印刷の際の寄贈対象者であった新村による寄稿記事がサンパウロ新聞に掲載されている。ブラジル、特にアマゾン地域への日本人戦後移住再開に関心を持った新村は、記事の中で『ツピ単語集』に関して以下のように述べている。

数年前には、友人からブラジルの標準的土語とポルトガル語および日本語との対訳辞書をもらつて、少しばかり語學を勉強する好奇心を起した、その土語とはツピ語と稱して南米著聞の主要な民族語であつて、未知のサンパウロ市香山六郎氏の編した簡便な小辞書である、日本でも譯された米國の言語學者サピア教授の名著の中にも度々引用されて知られ来たった所の土語なのである、この小辞典には語法その他必要な語學上の要項は付載され、渡航者には有用なしゆう珍本である、望南の一老學究も、この一小良著などによつて知識欲ないし好奇心がそそれた（サンパウロ新聞 1953年6月13日757号3面）。

既に香山自身の持ち込み記事において示されていた日本の言語学界からの関心が、本記事ではその当事者により日本側からの反応として明確に示されている。また、ブラジルへの日本人戦後移住再開の話題と絡めて、渡航者に有用と評価されている点は、香山著書の戦後移住との関連を示すものとして注目すべきといえる。

##### 6. 新聞社による記事

最後に、記名のない各新聞社による香山論関連記事を確認してゆく。先に確認した新村による関心は、本人による寄稿の2年前、香山論が発信された1951年に日伯毎日新聞でも示されている。「関心ようやく高まる 新村博士も興味持つ 香山さんのツピー単語集」と題された当記事は、駅名をはじめとしてブラジルの言語構成に浸透した先住民ツピ語の存在感について、単語及びツピ族に関する知識が含まれた内容に加え、刊行に際しての日本側の協力者の存在について紹介している。記事によれば、香山の旧友である、当時奈良博物館館長で言語学や江戸絵の研究者の黒田源次による斡旋によって同単語集は日本で印刷されたという。先に単語集の頒布状況を確認しているが、そのうちの約500部は日本の言語学者へと配布され、新村や金田一といった日本の著名な言語学者が非常な興味を寄せている、と伝えている（日伯毎日新聞 1951年10月9日768号3面）。記事の題目や内容から、香山の著作出版による香山論の発信直後より、日本側の関心もあいまって同論への一定の関心が集まったこ

とが窺われる。

今回確認できた記事の中でもっとも早い段階で香山論について触れているのは、1951年1月のパウリスタ新聞記事である。「ツピー語辞典、邦譯へ 動機は日本人との相似 香山さん 四十二年前の夢完成」と題された本記事には、ブラジルの地名におけるツピ語の貢献とブラジルの一部文法学者によるその容認、単語集の刊行過程と内容、そして香山によるコメントが挿入されている。

思い立つたのは昨日今日のことじゃないよキミ、ボクがブラジルに着いた年、つまり今から四十二年前に鈴木貞次郎さんからツピーに関した話をきいた際、ツピー族が骨格やら色やらが日本人に非常に似ている、ということを知って研究して見る気が起つたんさ（パウリスタ新聞 1951年1月20日545号3面）。

ここでは『ツピ単語集』や香山寄稿記事にて確認された、先住民と日本人の近縁性に関する移民初期からの関心が先行して伝えられている。なお、本記事では出版の目的について、一般にツピ語を紹介することとしている。

1951年8月のパウリスタ新聞では、日本で印刷された単語集の一部のブラジル到着を報じている。「ブラジル生活に広い視野と理解を 「ツピー単語集」完成」と題された本記事は、単語集の総頁数や収録単語数、印刷元についての紹介、移民当初からの東洋人と先住民の容貌および言語への関心について触れた後、香山によるコメントを挿入している。

コロニアの人々がツピー語を真に理解し話して下されば、お互い伯國での生活により広い視野と理解も生れ、ほんとうの土着人の氣持になれるし地理學上でも大きい示唆を受けると思う（パウリスタ新聞 1951年8月8日700号3面）。

ここでは、香山持ち込みの広告記事でも確認された『ツピ単語集』内の要素、すなわち勝ち負け抗争による日本移民社会内の緊張を緩和する目的が示されると共に、先住民語の理解による心情的な先住民への接近が再び示唆されている。

先に単語集の頒布状況で確認しているが、1951年10月のパウリスタ新聞では、サンパウロ市内の書店への単語集の1,000部入荷を報じており、既に大半が予約済で残部が発売される旨が記載されている（パウリスタ新聞 1951年10月7日749号3面）。また1952年5月のパウリスタ新聞では、著作頒布のために各地を巡訪していた香山が病に倒れたという記事が見られた（パウリスタ新聞

1952年5月8日905号3面）。

1953年4月29日、サンパウロ新聞の天長節特集号には、香山の名前は直接見られないものの、香山論の属性について重要な示唆がなされた記事が掲載された。「ブラジルの土人 何處から移住して来たか？」と題されたこの記事は、ポルトガル人によるブラジル「発見」当時から同地に住んでいた先住民の由来について考察したものである。冒頭でブラジルの各先住民族について概観した後、日本の文化人類学者の西村真次、デンマークの考古学者でブラジル考古学の父ペーター・ヴィルヘルム・ルンド、ブラジルの詩人であり先住民言語研究者のゴンサルヴェス・ディアス、アメリカ合衆国の文化人類学者のルイス・ヘンリー・モルガン、かつてブラジルを訪れた日本の考古学者の鳥居龍蔵、香山も著書で参照したフランスの人類学者のポール・リヴェ、ブラジル国立歴史博物館の考古学教授のアンジョーネ・コスタらの学説を援用しつつブラジル先住民渡来の経路を考察し、その大部分は南洋のポリネシア方面から移住してきたと論じている。鳥居の著作における「マラジョーの土器は日本の先住民の土器と心理的に酷似している」という指摘に触れた後、次の小見出しでは「日本人との人種的關係」と題して先住民と日本人の人種的關係への見解を示している。

ブラジル土人はその容ぼうが日本とよく似ているので太古に日本から移住して来たものだろうとの説をなすものもある、中にはブラジル土語と日本語の類似した言葉をたんねんに拾い集めて同祖説を立証しようとした学者もあつた。しかし、ブラジル土人と日本人とが血液的に直せつのあるなどということは政治的に利用される以外には價值のないことである、けれどもブラジル土人がポリネシア系統のものであるとすれば、ポリネシア族とせつ近していたインドネシア族が日本民族の血液の中に相當の割合で入り込んでいる以上、血液的にも文化的にも、全然無關係であるとはいえない（サンパウロ新聞 1953年4月29日740号17面）。

本記事では、ブラジル先住民と日本人との人種的關係について、ブラジル先住民のポリネシア起源を前提として日本人との血統的、文化的近縁性を認める一方で、名指しはされていないが香山論を彷彿とさせる先住民語と日本語の類似性に基づく同祖論を「政治的に利用される以外には價值のないこと」と評価している。勝ち組と負け組の双方に読者層を持つサンパウロ新聞における本記事から、批判的な観点からではあるが、香山論が当時のコロニアにおいて政治的言説として受け取られていたことを確認することができよう<sup>(13)</sup>。また、日本語新聞に

として新年と共に重要であり、通常より大幅に増頁されるものの祝賀広告がその多数を占める天長節特集号において、本記事が1頁を用いて紹介されていることは、当時における読者層の先住民への関心を窺わせるものといえる。

以上、日本語新聞内における香山論関連記事を分析した。各記事の内容を分析した結果、『ツピ単語集』そのものの流布に加えて、日本語新聞における関連記事によっても『ツピ単語集』に込められた主要なメッセージが伝えられていたことが確認された。また、日本国内の特に言語学界において一定の影響が見られたこと、そしてその影響力が日本語新聞を介してコロニアへ伝播した事例も確認できた。さらに、香山論が当時のコロニアにおいて政治的言説として捉えられていたことも明らかとなった。

## V. 香山論のブラジル社会への影響の可能性

先住民との近縁性によって、ブラジルを構成する正当な一員として日本人を認めさせるという意図が込められた香山論は、果たしてブラジル社会に届いたのであろうか。

香山の自伝を編纂したサンパウロ人文科学研究所の所蔵資料に、香山宛での書き込みがなされた書籍が存在している。『Diário Crítico 6º Volume - 1948 - 1949』と題されたこの書籍の著者は、香山の『ツピ単語集』出版当時にサンパウロ市立図書館長を務めていたブラジルの著名な美術評論・社会評論家のセルジオ・ミリエである。ミリエは日本移民に対して肯定的な見解を持った人物として知られており、勝ち負け双方の日本語新聞で好意的な紹介記事が掲載されている（パウリスタ新聞 1949年12月15日384号3面；伯刺西爾時報 1952年3月3日3234号3面）。本書には、ポルトガル語による以下の書き込みを見ることができる。

Para Rocro Kowiyama <sup>(14)</sup>	訳：香山六郎へ
agradecendo o vocabulário	単語集をありがとう
Sérgio Milliet	セルジオ・ミリエ

1944年から1956年にかけて出版された10巻のシリーズ本の一冊である本書は、1950年に出版された第6巻であり、第7巻は1953年に出版されている。『ツピ単語集』の出版年が1951年であることを考慮に入れると、出版後まもなく香山よりミリエへ『ツピ単語集』が送られ、その返礼としてミリエより当時の最新作である本書が送られた、とこの書き込みから推測することができる<sup>(15)</sup>。

この動きについて、ミリエ、また他のブラジル側から

の反応を調べるためブラジル国立図書館のデジタルライブラリーで、同時代のブラジルにおけるポルトガル語新聞記事の検索を行った。しかしながら、香山論に関して触れた記事を見つけることはできなかった<sup>(16)</sup>。現時点ではブラジル社会の反応まで確認できなかったが、当時のブラジル社会における代表的知識人への香山論の接近の試みが確認された<sup>(17)</sup>。

## VI. 小括と今後の課題

『ツピ単語集』における香山論の確認、日本の言語学界及びコロニアにおける『ツピ単語集』の一定数の頒布、負け組側日本語新聞での香山論の諸要素の流布、日本の言語学界からの反応、コロニアにおける政治的言説としての認識、そしてブラジル社会への伝播の試みから、香山論は当時の負け組側言論空間において一定の社会的影響力を有しており、また勝ち組側の一部へも伝わっていたといえよう<sup>(18)</sup>。

今後の課題としては、負け組側、勝ち組側を含めたコロニア全体における日本人と先住民の近縁性言説の検討が挙げられる。本研究の調査過程で、勝ち負け抗争の開始から香山著作の出版前後までの間の日本語新聞にて、香山以外による、日本人と先住民の近縁性を示唆する記事を複数確認できた。その中には、香山論について触れることのできた勝ち組側新聞の記事も含まれている<sup>(19)</sup>。これらの記事について、香山論と同様の意図を持つものであるのか、または全く異なるものであるのか、香山論との関連を踏まえつつ分析を行うことで、ブラジル日本移民史における同言説の位置づけを再定義したい。

## 注

- (1) アジア・中東系移民のブラジルアイデンティティへの接近について論じたジェフリー・レッサーは、ブラジルでよく聞かれる4つの人種観神話の一つとして日本人とブラジル先住民の近縁性を挙げており、その事例として香山の『ツピ単語集』を簡潔に紹介している（Lesser 2000: 3-4）。レッサーは別稿にて主に戦前における日本人とブラジル先住民の近縁性言説について触れているが（レッサー 2016 [1999] : 160-162）、香山論についてはレッサー編集の論文集にて、細川によって詳細が検討された（Hosokawa 2003）。本稿で参照した細川の先行研究はこの英語論考を改稿したものであり（細川 2008: 289-290）、同論考はポルトガル語にも翻訳された（Hosokawa 2006）。また香山主宰の聖州新報を中心に研究を行っている半澤典



- 子は、香山自伝の編纂時に、元原稿では10頁あった先住民関連の記述が1頁に削られたと指摘している（半澤 2016: 40-41）。サンパウロ人文科学研究所所蔵の元原稿（半澤 2016: 18）については、新型コロナ禍で同研究所が閉鎖中のため、本稿では参照できなかった。
- (2) ブラジル社会による日本移民の評価について、その導入時には肯定的な評価がなされている。サンパウロ州の日報紙コレイオ・パウリストアノは1908年6月25日付1面に、洋装で清潔、秩序正しい、伯国語を学ぶことに熱心、携帯品が多く欧州移民のような貧困者ではない、将来のサンパウロ州産業を担う、と日本移民を描写している（Sobral 1908: 1）。日本移民の導入については、農業労働力として、また日本の経済的社会的発展にあやかりたいとして歓迎する意見がある一方で、ブラジル社会の「蒙古人化」に繋がるとして反対する意見も存在した。アジア人の新たな入国を制限する提案を1921年と1923年にブラジル連邦議会へ提出したミナス・ジェライス大学教授のフィデリス・レイス議員はその理由として、同化できない血、言語、習慣、宗教を挙げている（レッサー 2006: 83-84）。
- (3) 当時における優生学的な白人化志向のブラジル人種観、そして北米の黄禍論の影響を受けた日本移民反対論に対して、賛成側のブラジル知識人の一部はブラジル人と日本人が同様の人種構成を持つとしてその同化可能性を示した（Lobo 1926: 151-152, 157; Roquette-Pinto 1933: 165; 齊藤 1954: 43; レッサー 2016 [1999]: 160-162; 前山 2002: 32-33）。例えば、著名な人類学者のエドガー・ロケッテ・ピントは、現代日本人はアイヌ（白人）、蒙古（黄色人）、そしてインドネシア（黒人）が混ざったものであり、ブラジルにおける三つの混淆した人種的发展と対応しているとその著書にて述べている（Roquette-Pinto 1933: 165）。日本当局の関係者や移民指導者の中には、日本移民賛成側のこうした言説を戦略的に用いた者もあった。戦前のアマゾンに農業植民地を開拓した福原八郎は、同地の先住民と日本人の類似を指摘した上でブラジルはアジア系の人々によって築かれたと主張している（レッサー 2006: 86-87）。但し、戦前日本移民の多くは日本帰国を前提とした出稼ぎ志向であったとされており（前山 1996: 209-216）、ブラジル社会への同化可能性を示す同言説の戦前における影響については稿を改めて検討する必要がある。
- (4) サンパウロ人文科学研究所創立会員の一人で『ブラジル日本移民八十年史』編纂委員長を務めた脇坂勝則は、ブラジルにおける日本移民及びその子孫によって形成されるコミュニティの名称について、戦前のそれを「邦人社会」、また戦後のそれを「コロニア」と簡潔に定義している（脇坂 1998: 66）。「コロニア」の起源はポルトガル語の *colônia* に由来し、日本移民の集団入植地という意味で戦前には用いられたが、終戦直後からは日本移民とその子孫を含む日系共同体を指す用語に転用された（細川 2008: 10）。本稿では戦前の日系共同体について「邦人社会」、また戦後のそれについては「コロニア」ないしは「日系コロニア」という表現を用いる。
- (5) ツピ族はアマゾン流域に居住し、後に海岸部、ブラジル南西部へ移動した先住民の総称である。ツピ語は19世紀初め頃までヨーロッパ人との交易に用いられ、ブラジルのポルトガル語に多くの単語を残している。かつてはパラグアイの準公用語のグアラニー語と共にツピ・グアラニー語族としてまとめられていたが、現在では別々の系統として扱われている（細川 2008: 238）。
- (6) 各新聞の属性については深沢（2010: 121-143）を参照した。サンパウロ新聞、パウリスタ新聞、日伯毎日新聞は2018年2月から5月に筆者がサンパウロ市内で確認、伯刺西爾時報は2021年4月から5月にインターネットにて確認した。各紙共に、若干の切り抜きや欠号がみられたことを付記しておく。
- (7) 昭和新聞、ブラジル中外新聞といった同時代の他の勝ち組系新聞については、現時点でまとまった所蔵を確認できず、今回の調査では対象外とした。
- (8) 細川は『ツピ単語集』出版当時のコロニアでの反応に関して、香山より著作を贈られた知人が他の友人と共に身近な地名のツピ語の原意について話し合ったというエピソードを紹介している。また、戦前の聖州新報に掲載されたツピ語とブラジルの愛国主義との関連を示唆する記事、1956年以降の日本語新聞上での言語マニアによる『ツピ単語集』関連記事についても触れている（細川 2008: 297-298）。
- (9) 『ツピ単語集』は、サンパウロ市内の4書店、サンパウロ州内の10代理店、パラナ州内の1代理店で取り扱われた（日伯毎日新聞 1951年7月25日705号2面）。
- (10) オウムを意味するポルトガル語 *papagaio*。
- (11) 本稿で扱う新聞原稿について、表記は全て原文の

ままとした。一部差別的表現が含まれているものもあるが、それらは当時の書き手の人種観を示すものとしてそのまま引用している。また、原文中の誤字については該当部分の上部に「ママ」と記した。

- (12) 小径を意味するポルトガル語picada.
- (13) サンパウロ新聞は、例えば勝ち組系新聞全盛期と思われる1951年4月29日の天長節記念特集号開始頁の上半分に、天皇皇后両陛下の肖像写真や菊の御紋を配置している(深沢 2010: 136-138)。深沢は、同時期の他紙(パウリスタ新聞、日伯毎日新聞、昭和新聞、ブラジル時報)特集号との比較でサンパウロ新聞が最も多くの広告原稿を得た要因として、勝ち組系読者の取り込みへの強い配慮を挙げている(深沢 2010: 136-137)。
- (14) Rocro Kowyamaという綴りは、『ツピ単語集』宣伝記事の香山による署名、『ツピ単語帳』の著者名と同じ綴りである(日伯毎日新聞 1951年3月4日594号4面;パウリスタ新聞1951年3月4日579号2面;香山 1951)。
- (15) 本書の存在については、2016年当時にサンパウロ人文科学研究所の司書であった松阪健児氏より示唆を頂いた。氏名掲載の許可と合わせて謝意を表したい。
- (16) 1950年から1959年にかけてのサンパウロ州発行のポルトガル語新聞について、koyama, rokuro, kowyama, rocroのキーワードで検索を行った(<http://memoria.bn.br/hdb/periodico.aspx>, 2021年10月15日アクセス)。
- (17) 政治的言説とは文脈が異なるが、香山の先住民語研究自体はブラジル側で一定の関心をもたれていたようである。移民画家で移民史家の半田知雄は自身の日記にて、香山のツピ語研究に関心を持ったブラジル人ツピ語学者が晩年の香山へ面会を申し出たことがあったと記述している(半田 年代不明)。
- (18) 半田は香山の先住民語研究について触れる中で、戦前移民が戦後ブラジル永住へと意識を変えた際、ブラジルの地を親しむようになった動機の一つとして日本人と先住民の近縁性言説が機能したと述べている(半田 年代不明)。
- (19) 拙稿(長尾 2016)では、日本敗戦認識後も勝ち組であり続け、勝ち負け抗争関連資料を多数収集した戦前ブラジル日本移民の榎木久一による先住民への関心について触れている。国立国会図書館所蔵の榎木久一関係資料の中には、ブラジル先住民関連の新聞記事や雑誌切り抜き(ポルトガル語

のものを含む)が多数存在しており、そのスクラップの表紙には「不出」と但し書きがされている(長尾 2016: 153, 156)。勝ち組側言論空間における先住民と日本人の近縁性言説への検討の中で、同資料群における先住民関連資料の持つ意味を示すことができるかもしれない。

## 参考文献

- 伊藤秋仁, 2010年「ブラジルにおける人種意識の変遷—人種民主主義から人種主義へ—」『紀要』京都ラテンアメリカ研究所, 43-61頁。
- 香山六郎, 1951年『ツピ単語集: 日・葡両国語対訳付』大日本印刷株式会社。
- , 1976年『香山六郎回想録』「香山六郎回想録」刊行委員会, サンパウロ人文科学研究所。
- 国際協力事業団, 1994年『海外移住統計(昭和27年度～平成5年度)』国際協力事業団。
- 斉藤広志, 1954年「日本移民をめぐる世論の推移」『ブラジルの移民問題』サンパウロ人文科学研究会, 38-63頁。
- サンパウロ新聞社, 『サンパウロ新聞』(サンパウロ新聞社所蔵)。
- 鈴木讓, 2006年「言説分析と実証主義」佐藤俊樹・友枝敏雄編『言説分析の可能性』東信堂, 205-232頁。
- 長尾直洋, 2016年「ブラジル日系移民研究における榎木久一資料の重要性に関する一考察: サンパウロ人文科学研究所所蔵の新資料を踏まえて」『東洋大学人間科学総合研究所紀要』第18号, 東洋大学人間科学総合研究所, 149-163頁。
- , 2019年「人文研前史—サンパウロ人文科学研究所の成立をめぐる史的考察—」『人文研』第8号, サンパウロ人文科学研究所, 5-50頁。
- 日伯毎日新聞社, 『日伯毎日新聞』(サンパウロ日本移民史料館所蔵マイクロフィルム)。
- 日本移民80年史編纂委員会編, 1991年『ブラジル日本移民八十年史』移民80年祭祭典委員会。
- 野村康, 2017年『社会科学の考え方 認識論, リサーチ・デザイン, 手法』名古屋大学出版会。
- パウリスタ新聞社, 『パウリスタ新聞』(ニッケイ新聞社所蔵)。
- , 1950年『1950年版 パウリスタ年鑑』パウリスタ新聞社。
- 半澤典子, 2016年「香山六郎と聖州新報(三): 聖州新報創刊から廃刊まで, 戦後の香山」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要 史学編』第15号, 京都女子大学, 17-54頁。

半田知雄，年代不明『半田知雄日記 民族文化の質と食生活の関係 私の知ったなつかしい新聞人 香山六郎さん』（サンパウロ人文科学研究所所蔵）。

深沢正雪，2010年「第2章 日系メディア史 第2節 戦後編」『ブラジル日本移民百周年記念協会日本語版ブラジル日本移民百年史編纂・刊行委員会編『ブラジル日本移民百年史 第三巻 生活と文化編（1）』風響社，117-143頁。

——，2017年『「勝ち組」異聞—ブラジル日系社会の戦後70年—』無明舎出版。

伯刺西爾時報社，『伯刺西爾時報』（国際日本文化研究センター「海外邦字新聞データベース」所収）。

フレイレ，ジルベルト（鈴木茂訳），2005年[1933年]『大邸宅と奴隷小屋』上下巻，日本経済評論社。

細川周平，2008年『遠きにありてつくるもの 日系ブラジル人の思い・ことば・芸能』みすず書房。

前山隆，1996年『エスニシティとブラジル日系人—文化人類学的研究—』御茶の水書房。

——，2002年「一九二〇年代ブラジル知識人のアジア人種観—日本人観を中心に—」柳田利夫編著『ラテンアメリカの日系人 国家とエスニシティ』慶應義塾大学出版会，1-40頁。

三田千代子，2018年「ブラジル近代史の一頁としての「シンドウレンメイ事件」」『JICA横浜海外移住資料館研究紀要』第12号，87-100頁。

レッサー，ジェフリー（小澤智子訳），2006年「ハイフンを探して—ブラジル国民としてのアイデンティティをめぐる苦闘と日系人—」レイン・リョウ・ヒラバヤシ，アケミ・キクムラ＝ヤノ，ジェイムズ・A・ヒラ

バヤシ編『日系人とグローバリゼーション 北米、南米、日本』人文書院，81-111頁。

——（鈴木茂，佐々木剛二訳），2016年[1999年]『ブラジルのアジア・中東系移民と国民性の模索—「ブラジル人らしさ」をめぐる葛藤と模索—』明石書店。

協坂勝則，1998年「一移民・コロニア・日系人—」『人文研』第1号，サンパウロ人文科学研究所，66頁。

Haberly, David T., 1983 *Three Sad Races: Racial Identity and National Consciousness in Brazilian Literature*. Cambridge: Cambridge University Press.

Hosokawa Shuhei, 2003 "Speaking in the Tongue of Antipode: Japanese Brazilian Fantasy on the Origin of Language." in Lesser, Jeffrey ed. *Searching for Home Abroad: Japanese Brazilians and Transnationalism*. Durham and London: Duke University Press, pp.21-46.

——，2006 "Expressando-se na língua do antípoda: fantasia nipo-brasileira acerca da origem das línguas." *Estudos Japoneses*, n. 26, pp. 25-48.

Lesser, Jeffrey, 2000 "Negotiating National Identity: Middle Eastern and Asian Immigrants and the Struggle for Ethnicity in Brazil." *The Center for Comparative Immigration Studies*, Working Paper 8, april, pp. 1-12.

Lobo, Bruno, 1926 *Japonezes no Japão - No Brasil*. Rio de Janeiro: Imprensa nacional.

Milliet, Sérgio, 1950 *Diário Crítico 6º Volume - 1948 - 1949*. São Paulo: Divisão do Arquivo Histórico (サンパウロ人文科学研究所所蔵)。

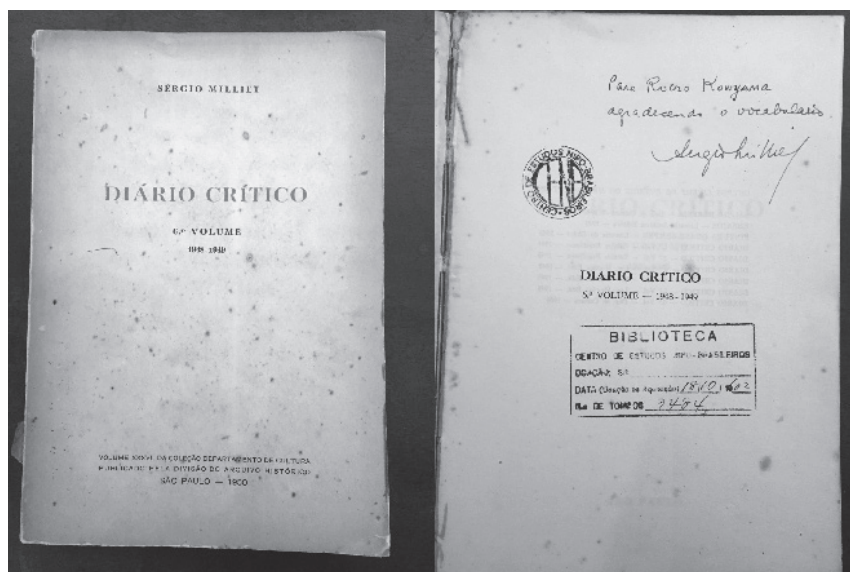


写真1. サンパウロ人文科学研究所所蔵の『Diário Crítico 6º Volume - 1948 - 1949』（左），香山宛の書き込みがなされたページ（右）。

- Roquette-Pinto, *Edgard*, 1933 *Ensaio de antropologia brasileira*. São Paulo: Companhia Editora Nacional.
- Sobral, J. Amandio, 1908 “Os japonezes em S. Paulo.” *Correio Paulistano*, 25 de Junho, p. 1.
- Sommer, Doris, 1991 *Foundational Fictions: The National Romances of Latin America*. Berkeley: University of California Press.

# A Study on the Social Influence of Rokuro Koyama's Hypothesis that Japanese and Tupi Languages Share the Same Origin: Focusing on Japanese Newspapers in Brazil

NAGAO Naohiro

## Abstract

The purpose of this study is to reevaluate the social influence of a case of Japanese immigrants' approach to Brazil's national integration model, as part of showing the diversity of the self-representation of Japanese immigrants in Brazil after World War II. Rokuro Koyama, a Brazilian Japanese immigrant who noticed similarities between the Japanese and indigenous peoples since the beginning of his immigration, compiled a small dictionary of Japanese and indigenous words in 1951, when the internal conflicts within the Brazilian Japanese immigrant community over the defeat of Japan in World War II were still occurring. While previous studies have evaluated Koyama's discourse on the kinship between Japanese and indigenous peoples as unique in its attempt to bring Japanese immigrants closer to the image of indigenous peoples, something that has been an important element of Brazil's national integration model since the 1930s, they deny its social influence. In this study, I used Japanese language newspapers and other sources as objects of analysis in order to examine the publication and distribution of the writings of Koyama, the spread of Koyama's theory in Japanese language newspapers, and the possibility of the spread of Koyama's theory to Brazilian society, thereby demonstrating that Koyama's theory had a certain degree of social influence at the time.

**Keywords:** Japanese Brazilian History, Kachigumi / Makegumi Conflict, Rokuro Koyama, Japanese Newspapers in Brazil

